

創刊のことば

名古屋工業大学開学記念の一つの事業として、名古屋工業大学学報を創刊する。

創造は進化である。創造のないところに文化も文明もない。われわれは、戦の破壊のあとに新しい国家を創造しようとしている。封建の深森を切り拓いて、民主の平和郷をうち立てようとしている。粗暴の荒野を耕して、文化の種をおろし、文明の花を咲かせようとしている。しかし、それは管理によって教えられたアメリカのとおりであってはならず、最も新しいといわれるソヴィエットのとおりであってはならない。もし、そうであれば、それは模倣にすぎない。新しい国家の建設は、あくまで日本民族のものであり、日本民族の創造によるべきである。創造の前には多くの苦難がよこたわっている。しかし、創造は望みであり、光であり、喜びである。深林の太い根株も、荒野の大きな岩も、拓く者にとっては、耕す者にとっては、苦難の底から湧く勇気の泉となるばかりであろう。笑って喜んで苦難に対する——それが今の日本人の心境であるとおもう。

文教の制度も一変した。名古屋工専と愛知工専とが合併して、名古屋工業大学となった。名古屋工業大学は新しい国家の、新しい制度によって生れた大学である。名古屋工専の、愛知工専の古い根株をおこし、大きな岩をとりおけて、全く新しい文化の花かおる平和な学園に創造しなければならぬ。旧制大学を模倣してはいけない。単にアメリカの、ドイツの大学の型を鵜呑みにしてはならぬ。それらのよいものを探りつつ、われわれ名古屋工大に職をもつ者、学ぶ者の創造によって、独特な真によい大学としなければならぬ。この大事業に精魂をうちこむことの喜びは真に創造の喜びであり、開学に当っての望みであり光である。

大学の使命はさまざまあるが、その中で文化の重要な一翼を担う学術技術研究の振興は、最も重要なものの一つである。それは単に文化、産業に貢献するばかりでなく、大学本来の使命である教育の深い裏付けであり、教育を有効ならしめるための権威と尊厳の源である。教育と研究——それは大学をつらぬく絶対の責任であり、大学教育者の最大の使命である。よく教えんとすれば、よく研究することを必要とし、よく研究すれば教育の上にその効果が現れる。教育と研究とは車の両輪のごとく離るべからざるものであり、はなれては、よき運行をしない。教育も研究も教育者に課せられた創造活動であり、そこに限りなき苦みとともに楽しみがある。また、文化の進展、産業の隆興は学術技術研究の強固な基底に立たなければ、新しく大きな成果を望むことはできない。しかるに、わが国特に戦後の日本において、民間の研究を振興するには、きわめて困難が多く、縮小または閉鎖を余儀なくせられるものが殆んど大部分である。したがって、今後の日本の基礎的応用的研究は、その大部分を新制大学が背負わねばならぬ。特に本学は数多き大学のうち、わずか四指を屈する単科の工業大学であって、おのずから他の総合または連合の大学と異なる特色を持たなければならぬ。その一つは、教育においても研究においても、従来の大学のごとく孤高におちいらず、産業界または実際技術家と緊密な連携をし、できるならば融合一体化して、活きた教育、活きた研究をすることである。お互に啓発し、お互に助け合い、お互に利益をうける——このような理想を実現したいと考えている。したがって、本学における研究は、まず学術の根底をきわめて、その応用を創造してゆく従来の総合大学のゆき方よりも、まず産業界の要望する活きた問題をとらえて、これを解決するために学術の根を深くおろすゆき方をえらびたいと思う。もとより、教官の専門によっては前者をえらぶことも大いにあってよいことは勿論である。

創刊号に集めたものは、名古屋工専および愛知工専の教官の今日までの研究業績をまとめたものである。それは統一を欠き、玉石いり交っているとおもう。しかし、不自由な環境と戦争、つづいて戦災、敗戦という苦しい条件を克服してつづられた科学技術者の不屈の魂の記録であって、尊いものである。この場合、同情に堪えないのは、戦災によって研究成果を焼燼した教官の少くないことである。

開学を記念して創刊された本学報が、国家再建の意気に燃ゆる本学教官の苦闘によって、年々際々その美果に飾られ、年と共にその光をますと同時に、いささかでも社会、産業界に恵沢を与えんことを、こいねがうものである。

昭和二十四年秋

名古屋工業大学長 清水 勤 二